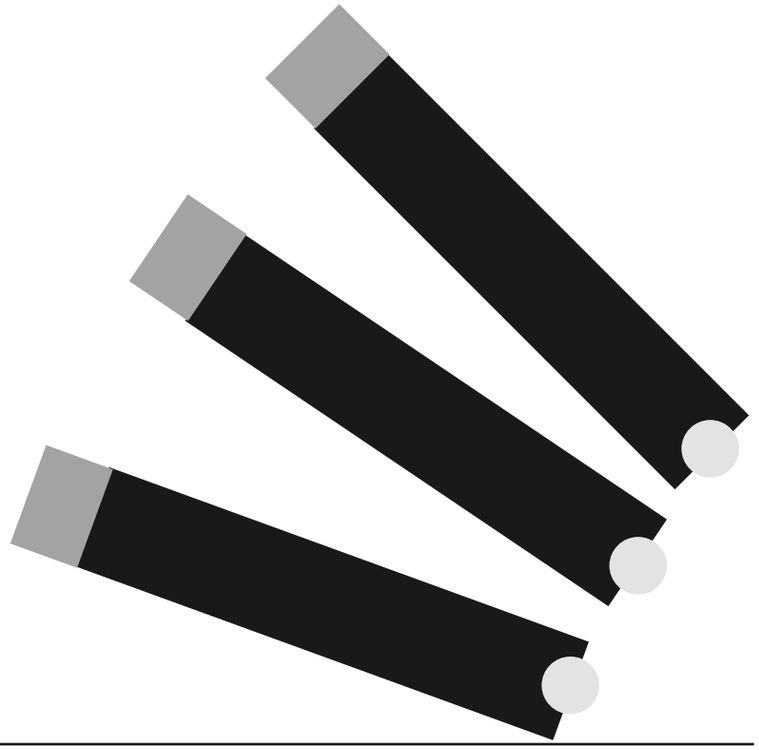
月　　刊

MAROAD

Vol.177



2022.10.30

詩と評論

月刊「Maroad」

Vol.177.2022.10.30

「月刊まろうど」編集部

俳句

◆船長

乾 佐伎

心にも隠れていそうこがらしは
ドロップ缶振れば遠くの街に雨
仰ぎ見るものなお遠い十二月
わたくしは船長　いわし雲の中
光る訳知るため光るオリオンは

◆紫紺　詠

岩脇リーベル豊美

星となり神々と鳥獣の秋夜
深深や今宵死の淵カシオペア
孔雀蝶活断層に平臥せて
針葉樹萎え朽つ月の灼熱に
塩塊舐め秣食むは仔牛の秋
北向う寝台特別急行列車の名
慈雨に濡れ獲物虎視せよ猛禽よ
聖地巡礼の速度か気球紫紺たり
銀杏葉を拾い集めて千の蝶

「月刊まろうど」177 号　目次

詩・俳句

船長（俳句）　……乾佐伎　3
紫紺　詠（俳句）……岩脇リーベル豊美　3
共時ソネット　……大西隆志　12
銀木犀……にしもとめぐみ　13
誰も知らない……黒田ナオ　13
やさしい姉さん　……中嶋康雄　14
送付します／八月のたわし　……いなだ豆乃助　15
あおいじかん／今日　病院で　……原田ひでよ　16
三叉の一如 ……大橋愛由等　17
都会掌景色……野口裕　18
焚き火 ……冨岡和秀　19

追悼―田村周平氏

創造力の彼方へ〈15〉 ……大西隆志　4
最晩年の詩「きみがいた」 ……田村周平　5

ART NOTE

珈琲タイムレッスン（大人の絵画教室）」⑨……はらだてつろう　9

連載小説

『マルクスの場合』―旅立ち①マルクスの巡行　……諸井学　6
20 回目／「海猫堂店仕舞記」……千田草介　7
「風景の隙間②」……リチャード・パーカー　10

連載 評論・エッセイ

レガートな日々〈5〉「お菓子の世界」 ……原田ひでよ　8
神戸詞（うた）あしび〈164〉「ロルカ「他の婚礼」を観てコロスの詩的位相を考える」……大橋愛由等　20

編集部だより★99／「現代詩手帖」から久しぶりの原稿依頼が舞い込んだ。フェデリコ・ガルシア・ロルカ著『ジプシー・ロマンセ集　カンテ・ホンドの詩』（思潮社、細野豊、片瀬実、久保恵訳 2022）についての書評文である。この二つの詩集については、故・鼓直氏（スペイン語文学者）からスペイン語の原書をいだたいていたので、原文と照合しつつ、書きすすめていた。その書評文には書き込まなかったが、訳語に「おやっ」と思うところが何箇所かあった。そのうちのひとつを紹介したい。それは、p116 の詩のタイトル「ジプシーのセギリージャの詩」についてである。原題は〝Poema de la Siguiriya gitana〟。訳者は「Siguiriya」を「セギリージャ」と訳していることに強い異和を感じた。フラメンコの現場（わたしはカルメンで年に 70 回以上、フラメンコ実演に接している。いわばタブラオの主（ぬし）としてフラメンコを見つづけている）に立っている。ロルカと同郷であるグラナダ出身のカンタオール（男性のフラメンコ歌手）の発音をきいていても「セギリージャ」ではなく「シギリージャ」としか聞こえないのである。簡単に音訳しても「Siguiriya」は「セギリージャ」とはならない。訳者は先行訳書の訳を踏襲したか、あるいは異なる規範で「セギリージャ」と訳したのかもしれない。ただロルカの詩の現場に生きているわたしを含めた詩友たちと、フラメンコの演者たちにとって、「セギリージャ」という言葉は流通していないことは確かであることは伝えておこう。ご存知のようにロルカの作品はいまもフラメンコの舞台でよく演じられている。あまりに浸透しているためバイラオーラのなかには、それがロルカの作品であることを強く自覚しなくてよいほどである。ロルカの詩世界には彼の出自であるスペイン南部のアンダルシアの風土と共振関係にあったことは、今回の書評文を書いている最中でも深く感じていた。／11 月の例会読書会のスピーカーは、詩人の木澤豊氏。語るテーマは好評の「宮沢賢治語り」。今回取り上げるのは、「虎十公園林」と「アメニモマケズ」の２作品です。（大橋愛由等）

大西隆志　想像力の彼方に〈16〉

赤穂の詩友の田村周平さんが亡くなった。兵庫県の南西部に位置する赤穂は、令制国でいう播磨で岡山県の備前に接している。十月十四日、姫路駅からJR山陽本線の相生駅で赤穂線に乗り換えて坂越駅に下車した。そこから播磨五川のひとつの千種川を渡り、左岸沿いを河口の方向にある斎場の赤穂メモリアルパークへと徒歩で向かった。陽が落ちかけていたので千種川の川面がオレンジ色にキラキラと輝いていた。夕陽は周平さんの自宅の方の空をマジックアワーと呼べる美しさで染められ、西国浄土ではないが、安らかな眠りで逝ったように思えた。周平さんが好きだった川と夕陽である。詩に何度も登場した大切なワードでもある。川も海もある小さな町の瀬戸内の赤穂は田村周平の原風景でもあるが、少年と老成した顔をもつことはこの土地で夢見る想像力への秘めた在り方なのかも知れない、それはアメリカにも、東京、京都とも繋がっている。もちろん姫路も。そして過去と未来も内包する言葉への信頼。詩が大切な道標のようだ。満七〇歳での逝去はこの時代では若いってこともあり、人柄の良さもありお通夜の式場にはたくさんの参列者が集われていた。その折に配られた手作りの小さな二つ折りの紙片。多分最後の詩作品となってしまった「毎日する事がある」を引く。

朝新聞を取りにいく
メダカに餌をやって
遊びにくる猫のために
裏の戸をあけてやる
卵焼きを作り
鮭を焼いて弁当をつくる

夕方は肴のレシピを考えて
買い物に行く
午後には
ベランダで無為の時間を過ごす
無為な日が十日もつづくと
一遍の詩が出来ることもある
僕の詩は小さな声
小さな声は夜になると月に集まり
その光は何処かの誰かに
届くかも知れない
生きているから
毎日する事があるのか
毎日する事があるから
生きているのか

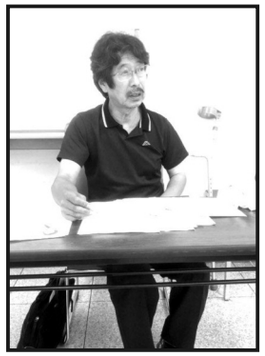
ここで田村周平さんのことを簡単に紹介する。先ず周平さんのただ一冊の詩集『アメリカの月』は、一九九八年四月二十四日発行で相生の先輩詩人高須剛が営んでいたガル出版企画より上梓された。奥付には《田村周平（たむら・しゅうへい）一九五二年に赤穂市生まれ。早稲田大学中退後、アメリカ合衆国南カリフォルニア大学に遊学。東京で美術雑誌の編集に従事。帰省後、赤穂で居酒屋を経営。「ペルレス」「采」などをへて現在「湾」同人》とある。周平さんとは彼が赤穂に帰ってきて直ぐに出会った。東京での美術雑誌の編集者を辞めての帰郷だった。僕のフェイスブックに少し書いているので引っ張り出してみる。《実を言えば、新宿ゴールデン街にある飲み屋「なべさん」で、三人の田村さんの話を聞いていた。今は砂子屋書店の社主で詩人の田村雅之さん、写真家の田村仁さん、そして田村周平。僕も東京に行くと「なべさん」に寄っていたので、周平さん話を「播磨やったら詩を書いている大西隆志を知っているやろう」と言われていたらしい。そして詩と批評誌『ユリイカ』一九七二年八月号でユリイカの新人として紹介されたいた周平さんの幼馴染みの本庄ひろしさんと出会う。僕の方は編集者で神戸にいた阪本周三さんを紹介。そこから同世代の四人で詩に対する思いや、酒精の勢いも借りて同人詩誌『ペルレス』が生まれた。〈略〉ある意味で周平さんが赤穂に帰郷したことで、播磨・姫路でのあらたな詩の活動が起こり、ローカルな暮らしを大切にする同志でもあり、「詩、酒、女」を通した詩友で、ネオ・リリシズムを標榜していたボヘミアンだったのかも知れない》と。

あらためて周平さんの詩を読み、最近書いているエッセイなどを読んでいると、小学生の頃から一緒に遊んでいた友人の本庄ひろしさんとの繋がりも絶景であり、その後高校から東京に転校した本庄さんが高校三年の時に「ユリイカ」に彗星のように登場したことも刺激になり、現代詩というよりも詩人たちに出会っていく。本人も大学進学で上京したこともあり、文壇バーなどで金石稔さん、池井昌樹さん、藤田晴央さん、当時のスター詩人の清水昶さんと通じあった。確か清水さんは一回目の結婚の仲人だったと思う。詩の読者として幸福だと書いていた。そして、田村周平さんが詩を書き始めたのは赤穂に帰ってからだ。僕らの「ペルレス」は大きなきっかけになったように思う。「ペルレス」も一九八七年十月から始めて、一九九四年八月に七号を出して終刊した。その後は一九九五年八月に同人詩誌「采」を田村周平さんと尾崎美紀さんと僕との三人で始めるが、翌年九月で四号を出し終わった次第。『アメリカの月』に収録されている詩篇の大半が「ペルレス」「采」のように思う。その後は「湾」に詩作品を発表していた。今から十五年前だが脳出血で倒れ生死を彷徨った。一時は詩作を長期中断していた。この六年程前から、左半身が不自由になっても言葉を紡ぐ努力は続け、リハビリ的にまた書き始めていて、かつて詩作の切れも戻ってきていた。二冊目の詩集も出したいと語っていたから残念。周平さんのモットーとして、詩人天野忠さんの言う「副作用の少ない長く常用できる詩を書きたいと思っている」と言っていた。記憶、それも残された記憶へは詩は有効だと周平さんは考えていた。最後に詩篇「地平線をおって」から一部。

単純な生活ほど純粋な声をもち
豊かなライフほど単純な言葉を持っている
もう一遍「川のある町」より。
川のある町は淋しいが
川のない町はもっと淋しい

最初に備前と書いたが、周平さんは幼い頃に祖父母に預けられて備前の山の中で過ごしていた。僕も幼少期から中学一年まで、田舎の溜池の多い土地の祖父母の家に預けられていたから、共感できることがあったのかもしれない。

今回の田村周平さんの逝去の報告をさせてもらうと、一か月前の九月十六日大動脈解離で岡山市の心臓病センター榊原病院に緊急入院。そして大動脈解離手術は成功したが、意識が戻らなくて脳梗塞で亡くなられたのは、十月十三日で三時五十二分。喪主を務められたのは妻の田村奈緒さん。アスリートらしく凛とした佇まい。挨拶も「夫も好きなことをしてきたが、私も好きなことをさせてもらっていた」と。シンプルだが愛情がこもっていて素晴らしかった。フォークバンド「かごや姫」の伊勢正三似でもあり、眼鏡と口髭の写真は本人の希望の写真だった。告別式の出棺時の音楽は息子さんの作曲した楽曲だった。



◆きみがいた

田村周平

街で素敵な美人に出会ったら
振り返ってみる
向こうも振り返っていたら
幸福な一日になる
君がいたから

部屋で一日過ごす
レコードを聴きながら
豚の足を煮て
それだけで素敵な一日
君がいたから

旅先で小さな居酒屋に入る
地の肴で飲みながら
旅の果実を並べる
それは愉しい一日
君がいたから

車いすで散歩に出る
花を摘んで
ビアグラスに野花のブーケをつくる
それだけで幸福な一日
君がいたなら

赤穂市在住の詩人・田村周平氏が2022年10月13日（木）午前3時52分脳梗塞で死去されました。享年70歳。9月16日大動脈解離で岡山市の心臓病センター榊原病院に緊急入院手術。大動脈解離手術は成功したものの、その後意識が戻らず脳梗塞で亡くなりました。15年前に脳溢血で生死を彷徨った病歴あり。葬儀は10月15日赤穂メモリアルホールにて執り行われ、喪主は妻・田村奈穂氏。謹んでお悔やみ申し上げます。ここに掲載いたしました詩稿は、2022年3月14日に赤穂市で開催された「カフエ・エクリ」の合評会にて発表された作品です。最晩年の作品となります。

◆『マルクスの場合』

「旅立ち」①マルクスの巡行

諸井 学

私はマルクスと共に生活することによって、怠惰な生活が改められ、休日も早く起きるようになった。朝庭に出ると、マルクスは走り寄って来た。散歩を焦って動き回る身体を押さえてリードを付けた。そしてマルクスに先導されて門を出た。私は、きょうも、お節介な人間や忘恩の徒に、傲慢な人間や欺瞞的な人間に中傷家や非社交的な人間に出会うであろう。（二・一）

マルクスはわが物顔で歩いた。私は出会う人々に挨拶しながらついて歩いた。町の愛犬家たちとも親しくなり、マルクスが犬たちとお尻を嗅ぎ合っている間、私たちは当たり障りのない天候の挨拶などを交わした。人々は、内心軽蔑しあいながらも、外面ではたがいに阿諛追従の態度をとり、内心ではたがいに優越を競いながら、表向きはたがいに譲りあう。（十一・十四）

マルクスにも好みがあって、トイプードルには喜んで駆け寄り、ダックスフントは無視して通り過ぎた。そして、吠えかかってくる愚犬ブルマンを成敗しようと挑むマルクスを、今はまだその時でないと諌め抱きかかえた。

マルクスは自らの使命を果たすため、自らの版図を進んで行った。そして、自らが定めた地点にのみ止まり、マーキングをした。電柱、駐車場の金網、「飛び出し注意！」と書かれた子供の看板、酒店の前のアサヒビールの自販機（もしかすると、密かにキリンビールから特命を受けているのかもしれない）。そして喫茶店の駐車場の入口の「この中でイヌに糞をさせるな！」と書かれた木札、これらにマルクスは傍若無人に小便を引っ掛けて行った。

家から三百メートルほど東にマッチ工場の跡地があり、その中でリードを外すと、マルクスは喜び勇んで草むらの中へ駆け込んだ。雑草の動きでマルクスの居場所は容易に分かる。草がうねうねなびいている。

突然、マルクスが草むらの中から蛇を銜えて現れた。一瞬ドキリとしたが、よく見ると、五十センチほどの古い水道ホースを銜えていた。マルクスは宝物を探してきて、私に褒めてもらおうと、ホースを引き摺りながら駆けてきた。そして私の前で首を振って、銜えたホースを右に左に撥ねさせてみせた。

私は驚かされた腹いせもあって、素知らぬふりをきめこんだ。マルクスは銜えていたホースを何度も地面に撥ねさせたあと、ホースを地面に落とし、私に向かって一声吠えた。そして再びホースを銜え、これ見よがしに右に左に振りながら後ずさりした。私の反応を見ながらホースにじゃれている。私は動かない。するとマルクスは私の前で腹這いになり、ホースを前肢で挟んでその端を齧りはじめた。

私が立ち上がると、ハッとして噛むのを止めた。私は無造作にホースを取り上げ、遠くへ投げた。マルクスはそれを追って駆けだした。そして、再びホースを銜えて嬉々として駆け戻ってきた。また取り上げて、ホースを投げた。また銜えて戻ってきた。また投げた。また銜えて戻ってきた。マルクスはまるで新しいゲームを始めたかのように楽しんだ。ところが、次に戻ってきて、ホースを差し出したところで、私は意地悪く首輪にリードを繋いだ。マルクスは振りほどこうとしたがすでに遅い。

私はホースをうしろへポイと捨てた。マルクスは慌ててそれを取りに行こうとしたが、リードに阻まれ後肢で立ってもがいた。

「これでおしまい！」

私はマルクスを引き摺るようにして歩き出した。マルクスは恨めしそうにホースの方を振り返りながらついてきた。しかし、工場の跡地を出る頃にはホースのことをすっかり忘れ、家路に向って私の前を悠然と歩いて行った。

海猫堂店仕舞記⑳

千田草介

「かたがた、あれは」住職が月を仰ぎ見つつ、感に堪えぬ顔で、音吐朗々と歌を詠んだ。「あかあかやあかあかあかあかやあかあかやあかあかあかあかやあかあかや月」

「まさに」ミロクさんがうなずいた。「明恵上人が詠んだとおりの月」

「あんな歌を作られては」私は言った。「歌詠みも詩人も小説家も吹っ飛んでしまいます」

「そのすぐそこに祀られておる人麻呂さんも」と、住職が月照寺に隣接する柿本神社を一瞥した。「東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ、と詠んだが……」

「菜の花や月は東に日は西に」

「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」

蕪村の句と阿倍仲麻呂の歌、住職とミロクさんとが掛け合いをやりかけたのをハーヴァード氏が制した。「月を詠みすぎるから、こんな月だらけのややこしいことになっちまったんじゃないですかね。可哀想に、ほれ〈ピンク〉ちゃん、球（ボール）からもとの猫にもどった〈かろん〉に食いつかれて泣いてるじゃないですか」

「冥王星の月かね」ミロクさんが言った。「カロンは三途の川の渡し守」

「三途の川ではなくてステュクス川ですよ」とチャンドラが正した。「川を渡るには真田紐でつないだ六文銭ではなくて、オボルス銀貨一枚が要ります」

「物知りな猫さんですな」ハーヴァード氏が感心して、「そういえば、冥王星は惑星ではなくなったとか。主人が落ちぶれたせいで、子分たる〈かろん〉も情緒不安定にならざるを得んのでしょう。準惑星の衛星も〈準衛星〉に格下げ、太陽系の〈月〉の部類に入るかどうか微妙、仲間はずれにされるかもしれない、となれば、暴れたくもなるでしょうな」

「主人がかね」ミロクさんがチャンドラを見て言った。「わしの主人はこの猫。人に非ず。となればわしは猫以下の何かで、暴れても不思議ではないことになるかね」

「ミロクさんはそういうことを超越して悟りをひらいてるやないですか」猫が言った。「飛行機のことは別として」

「悟りとかなんとか、のんきな話をしている場合ですか」私は言った。「〈かろん〉に引っ張られて〈ピンク〉ちゃんが冥府へ拉致されてしまいませんか」

「和尚さん、そこの、だれだれさん、助けてえ」

〈ピンク〉の悲鳴が境内の空気をつんざいた。

（つづく）

レガートな日々⑤

原田ひでよ

お菓子の世界

七月に行なったコンサートの再演が来春に決まり、デモ演奏と打ち合わせのために、十月連休に三重県に赴いた。

自作の物語や詩を演奏と組み合わせた演目は、いつのまにか私のコンサートの大切な一部となっている。今回は、長年温めてきた構想で、ピアノ曲集「お菓子の世界」の中から九曲を選び、物語を書いた。この作曲家である湯山昭氏をはじめ、子どものためのピアノ作品については、一度きちんと取り上げて書くつもりだ。

「お菓子の世界」は、単に漠然としたイメージでなく、とても具体的にお菓子を音で表している。例えば、「ショートケーキ」の左手の和音は、土台のスポンジケーキを表し、右手のメロディは、甘いクリーム。バウムクーヘンの生地の幾層もの重なりは、四小節ごとのフレーズが積み重なる形。そして、私が書いた物語もまた、全て、音楽とリンクしているのがミソだ。

例えば、少しずつずれながら進む左手と右手のリズムがフルフルっと揺れる様子を表している「プリン」は、物語では主人公の女の子の揺れる心を表す場面で弾かれるというように。

お菓子作りの好きな私は、パティシエ志望の主人公と音楽に重ねて、そのあれこれを綴るのは楽しかった。当初は中学生対象に書いたつもりだったが、何しろ今の子はませてる。小学生だってもしかして、私の高校、いや大学レベルの恋愛事情かも、という話になり、小学生対象となると、ドロドロの三角関係を話題にするわけにもいかず、プログラム前半の作曲家の恋愛話も、サラッと進行することにしたのだった。

ここで、今回タッグを組んだ仲間を紹介しよう。バイオリンのYちゃんは学生時代、四年間伴奏をしていた仲だ。中学の先生であった彼女は、赴任した村の弱小吹奏楽部を東海大会金賞にまで押し上げ、その折には、村を挙げて応援のバスが出たというドラマのような伝説の持ち主だ。そうした現役の間も、地元のオーケストラでコンミス（女性のコンサートマスター）を務めたり、大学院に在籍したり、自分の勉強も手放さなかった。本当にやりたいことの実現に向けて早期退職したのちは、年間数十回の本番をこなし、コロナ前は、毎年ドイツでも演奏の機会を得ていた。三重県在住で忙しい彼女とは、一度しか合わせの時間を取ることができなかったが、二人で、ピアノ曲をバイオリンとの形へと、アレンジを試みた。

MCに朗読にと大活躍のKさんは、家族ぐるみ長年の友であり、よき理解者。美術・音楽を愛し、華道・書道を極め、様々な問題が山積する現場で、子どもファーストを貫く熱血保育教諭さんだ。私が書いた原稿も、更に彼女流に翻訳し、一瞬で子供たちを惹きつけ、音楽へと引っ張り込んでくれる。目にした方々が必ず絶賛するチラシとプログラムも彼女の手によるものだ。加えて、学生オーケストラでトランペットを吹いていたという理系出身のパティシエMさんが物語中のお菓子を再現した、オリジナルクッキーを、お客様へプレゼント。会場いっぱいのお客様からは、間近での音はビンビン体で感じられたなど、嬉しい反響も寄せられた。

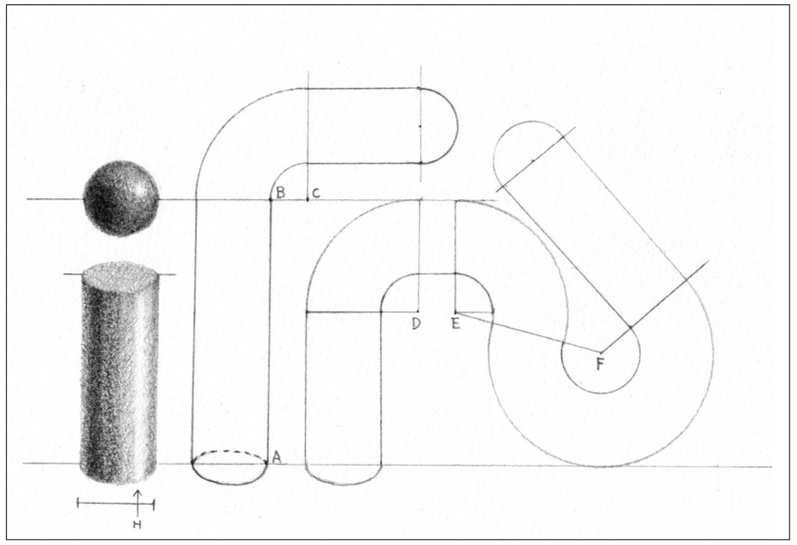
それにしても、超多忙なYちゃんが再演の話を早急に進めたのは、フック先生が亡くなってからというもの、いつまでも鍵盤に向かえない私を見かねてのことに違いなかった。

おそらく私たちは、瀕死の床にあっても「弾いて」と言われれば「イエス」と応えてしまう生き物だ。そしてその瞬間から準備と練習は始まるのであり、音を出すことで少しずつ立ち上がる、ということを彼女自身、身をもって知っているからだろう。Yちゃんは、このコンサートで三重県を席巻しようと言う。ビッグな話であるが、彼女をもってすれば夢物語でもないのかもしれない。少なくとも、私が作ってきた原形が、全く違う形に飛躍する可能性を秘めている。再演ののちには、当時はまだ珍しかったこんなスタイルのコンサートを始めたそもそものいきさつと、その後の長い変遷を、振り返ってみたいものだ。

（ピアニスト）

ART NOTE―⑨

9 珈琲タイムレッスン（大人の絵画教室）



○レッスン2―4　球と円筒形（作図法）

・コンパスと直線定規を使い球と円筒形を描きます。

○レッスン2―3　球とさくらんぼ

・直径2センチメートルにします。

・円筒形の上面、底面の楕円の両端に角ができないように注意する。

・底面は見えない楕円（点線部）を意識して描く。（フリーハンド）

・点CDEFはコンパスの針の位置です。

・点Bにコンパスの針を置くと内角が直角になります。

・BCの距離でカーブの大きさが変わります。

・カーブが連続する場合、EFのように、EFを直線で結んだ位置につなぎ目ができます。

・Hはハイライトです。円筒と球のハイライトとの位置を合わせる。

＊球のハイライトとは球の一番明るい一点のことです。

2　桜桃とプッシュピンを描く（課題の目標）

・透明アクリルと金属と桜桃の質感を明度の違いで表現することが技術的な課題です。桜桃が準備できなかったら球にしてください。

・プッシュピンを刺した桜桃を見て何かを感じること。

3　注意点（ヒント）

・濃い線は立体表現の邪魔になりますので、軽く描きましょう。

・先ずは見本通りに作図してみましょう。

はらだてつろう（美術家）

連載小説

風景の隙間（2）

リチャード・パーカー

高橋の部屋にどこからともなく入ってくる者がいる。何者かは時々壁を抜けて部屋に入ってきて、どてっと横たわり身づくろいをしている。どこかに専用の出入り口があるはずなのだが、もしかすると彼女が出入りできるようなカラクリが仕込まれているのではないかと彼はびくりとするようになってきた。

彼女は何かを企んでいて、誘っているような眼をしている。それは単なる一対一の恋愛劇ではなさそうだ。この家もこの街も巻き込んでいくような事件のために彼と組もうとしているように見える。その秘密の計画を打ち明けるために彼に接近しようとしているにちがいなかった。

乱暴に積み上げられた段ボール箱を、一人でばりばりと音を立てながら解いていると、何処からともなく一匹の雌猫が入ってきた。全体に灰色に見えたが、良く見ると脚と顔には縞模様が僅かに残っていた。彼もまんざら猫が嫌いな方でもないので、呼びもせず追いもせずに勝手にそこらで遊んでいれば良いと思っていた。恐らく、地震で家も飼い主も失った飼い猫だ。人間以上に寂しい気持ちの猫だ。

猫の方も、彼が一目で気にいったらしく、別に鳴くわけでもなく、身をよせてくるわけでもなく、暫くは部屋の隅でおとなしくしていたが、彼が紐を解くのを見ているうちに自分でも紐に触りたくなったのだろう、首を傾げながら近付いて来た。徐ら彼の顔を伺い、少しは注意を引こうとして紐の端を曲った手首で揺らしはじめた。ときどきこちらを向きながら、叩いたり引っ掛けたりしていたが、やがて疲れた表情を見せて、猫は「にゃー」と笑った。

それには構わず、彼は小包の中のものを並べはじめた。いやな予感がした。すると猫は突然包装紙に向かって突進してきた。そのまま包装紙に乗ると三メートルばかり滑走したのだ。そろそろ追い出すときが来たと思い、彼は猫を睨み付けて立ち上がった。だが、相手もなかなか気の利いた猫で、首を落としてこちらを伺うが早いか、さっさと後ろ姿を見せると背中の筋肉を二三度ぴくぴくとさせてドアの方に向かって歩き始めた。全く厚かましい猫だ。

やれやれと思った瞬間、急に声がした。

「ちょっといいですか？」

彼はキョロキョロしたが、部屋の中にはその猫しかいなかった。

「君喋れるの？」と彼が聞くと、大きな欠伸をして、「まあね！」と大きな欠伸をして長い舌を出し、鼻の当たりと、顎全体を大きく円を描きながら舐めまわした。彼はその大きな目の中に引き込まれていた。

「ちょっとくらいなら付き合ってもいいわよ。わたしフーコって言うの。智子の家来なの」

「智子って誰なの」

「あら、いやだ。あなたが喋っていたこの家の娘さんよ」

「でも、君、何時から喋るようになったの？」

「さあ、何時からだったかしら。かなり以前からよ。もう誰も覚えていないくらい昔からよ。まだ希望というものが生きていた頃の言葉かしら。でも、あなたはその頃から本当のことを喋らなくなった。ちがう？　そしてきっと誰かと別れたはずよ。あなた自身の言葉がすべて通じなくなったのはその頃からよ。それからあなたの喋っていることは総て嘘よ。他人の言葉でしか喋らなくなったはずよ。ね、そうでしょ」

と言いながら、猫は少し勿体をつけるようにピンク色の舌をペロペロさせながら、灰色のまがった肩の線に沿ってブラッシングを始めた。

確かにあの頃から彼は本音を話さなくなった。人生にタイムを掛けたのだ。彼は生き方を変えたのではなく止めてしまったようなものだ。本当のことを話す代りに冗談を覚えた。冗談で総てをやり過ごしている方がただ黙っているよりも深い孤独に辿り着いたような気持ちになれた。言葉が内部の言葉と外部の言葉に別れていった。人を求めるための言葉は内部に暗く沈澱し、人を避けるための言葉は社交的な明るい性格を演じさせていた。そう言うことが大人になることだと当時の彼は思っていた。彼の本来の言葉は外に行かずに内部へと向かい始めていた。それと同時にこの忌まわしい言葉に満たされた外部の世界は何時吹き飛ばしてもよい、実に下らない何の価値もない単なる時間潰しの世界に思えてならなくなっていた。

「でもねえ、わたし、相手は選ぶようにしているの。滅多に喋りたい人なんていないし、ねえ、お願いがあるの。このこと誰にも喋らないで欲しいの。約束してくれる？内緒にしてくれないと、わたし、きっと見せ物にされると思うの」

「でも、どうして僕を選んだわけ？」

「あなたねえ、猫に道理があると思っているの？単なる直感よ。きっとあなたはいい人よ。だって彼方には内部の言葉ってものがあるんですもの。それでなきゃわたしの言葉は聞こえないわ。」

そう言いながら、彼女は頭を下げて擦り寄ってきた。

「どうもありがとう。僕も約束は守るよ。君の秘密は誰にも喋らないよ。でも、猫が喋るからって、彼は別に君を尊敬しているわけではないんだ」

彼女は少しがっかりしたようだった。それでも彼に、何か期待している表情が読み取れた。

「でも、わたし、綺麗でしょ？」

「まあね。でも、やっぱり君とは何処かであったような気がする。でもその時は、君は確か猫じゃなかったはずだ。不思議な気分だ」と、彼は言った。

「へえー、『まあね』だって。でも、わたし、貴方のものにはならないわよ」

「当たり前だ。彼だって、君のものにはならないよ」

「じゃあ、友達ね」

「ああ、友達でいいよ」

彼女は、広角レンズのような目の玉を大きく開いたまま思案していたが、彼が目を逸らしかけた途端、「だったら、どうしてわたしの秘密を知りたがらないの？わたしってハーフなのよ」と、得意げに責めたててきた。

「そう言われればそうだけど、でも、それは見れば解ることだから、秘密って言わないんじゃないかな？」

そう言いながら彼は彼女の真綿のような毛に降れていた。

「ほんと？見れば解る？じゃあ、秘密じゃなくってもいいけど、わたしって、ほんとにハーフなの。わたしのお父さん、ロシアン・ブルーなの。でも、船に乗って帰ってこないの」

「へえ、それで、君は私生児かい？」

「やあねえ。それって二重の差別。人間らしい嫌みな言葉だわ。猫の子は皆、非嫡出子よ。人間の結婚は惰性の産物よ」

若い雌猫は、そう言うと、大きな目をつぶり、急に馬鹿な表情になり、ハイヒールの格好で欠伸をし、壁に張り付いたのかと思っていると、何時の間にかいなくなっていた。窓の外を見ると海峡が灰紫色に輝いていた。海上にはさまざまな色の光線が交差していて、その何本かが窓の中に飛び込んで来ていた。

猫は催眠術師である。方法は簡単で自分が眠ることによって相手も眠らせてしまう。

彼が目が覚めると猫は娘に変わっていた。

「このバカでかいライティング・ビューローはどうやってもこの部屋のドアからは入らないわ。それなら、窓から入るかといえば、窓も狭すぎる。そこで壁をくりぬいてそこからすっぽりと押し込んだのよ。でも、またここから出すときのことを考えて、この穴はそのまま残してあるのよ」

そういうと、彼女はライティング・ビューローの下の扉を開けた。中は空っぽだったが空っぽの奥にも扉があった。それなら、この家具の裏はどうなっているのかと彼は確かめようとしたが、驚いたことに背面は壁に繋がっていた。

「なるほど、秘密の入口はここにあったのか」

彼は、言われたように」ライティング・ビューローの奥の扉を開けてみた。ところが中は真っ暗闇で光を当ててもブラック・ホールのように光を吸い込む絶対闇だった。ただ、闇の表面が黒い旗のように靡いていて誘い込まれそうになった。わずかに揺れるものがあり、白く発光する竹の根が見えた。この地下の竹の世界は彼女が言っていた竹藪の地下世界で、猫の鳴き声がわずかにするだけだった。

（つづく）

◆共時ソネット

大西隆志

セメント袋が階段下の空間にたくさん置かれ
忌み名の落書きがゆっくりと伸びていくらせるのだ
邪魔者を消したのではなく、浮かび上がる歩手前
やみくもに言葉が指し示すのは行進の一

じっくりと型枠を取り除く者の手先の感触
つまらない日常なんてないよ、イボイノシシが佇む
ぞんざいにしたつながりを丁寧にひろうことで
ンギリとはスワヒリ語、そしてイボイノシシは走る

死角を手にしながらも、好転を願うのは約束事もないぼくら
調べるごとに世界は更新されるわけではないが真実を
約束の壁際を手のひらで確かめながら進む

苛立ちも一瞬のことでしかないが
体育館に集められたぼくらは声を張り上げて歌う
んみゃーち、宮古の方言、ありがたいのだ

◆銀木犀

にしもとめぐみ

風が少し冷たくなる頃
あの曲がり角で
咲いている
あなた

ひっそりとして
目立たないのに
振り返らせる
あなた

初恋は銀木犀の香り
白く小さな花が
恥じらい　見つめる　想い

遠く木の下に佇んでいた
その姿を
覚えている

◆誰も知らない

黒田ナオ

今夜わたしはベランダから
風と一緒に旅に出る

火星人の夫はまだ
宇宙船に乗ったまま
遠い銀河をさまよって

今夜わたしは旅を続ける
山を超えて
海を渡る

そのとき赤ん坊は
ベビーベッドの中でひとり
楽しそうに
まだわたしが知らない言葉で
知らない歌を歌っている

◆やさしい姉さん

中嶋康雄

周りを犬に囲まれている
犬はよだれを垂らしている
よだれはアスファルトに落ちると
小さな黒い犬になり
さっそく吠え始める
その吠え声は耳の奥で蚊になり
蚊は内耳あたりで血を吸い
耳の奥がかゆくてかゆくて
姉さんはやさしい
一緒に散歩をしてくれる
アイスクリームを買ってくれる
アイスクリームに夜が塗られており
食べるとたまらなく眠い
夢の犬はかわいい
犬は砂粒よりも多く
食用鶏が砂の代わりに犬を食べている
鶏は定期的に殺され
出荷するトラックは定期的に壁に衝突し
炎上し漆黒の煙を
鼻の奥が痛くて痛くて
違法薬物をまた姉さんが摂取している
犬が姉さんの顔を噛んでいる
姉さんは犬の頭を撫でている
折り紙でカブトムシを作れる姉さん

こんどはなにを折ってくれるの
高速道路で炎上するトラックで
鶏の部位たちがばらばらのまま
生きかえり火と煙を食べている
それぞれが鶏の声で鳴いている
運転手が燃えている
鶏が運転手の焦げた腸を啄んでいる
姉さんが過剰摂取している
口から泡がぶつぶつ出ている
救急車を呼ばなければ
救急士が姉さんの口を吸っている
救急士が姉さんの服を脱がしている
姉さんが痙攣している
なにがあったの
なにもなさすぎたの
ねえ姉さん
おじさんの家で鶏が待っているよ
とさかの青い珍しい奴
言葉をしゃべる珍しい奴
おじさんが姉さんのために
鶏の羽根を毟っているよ
おじさんが姉さんのために
鶏の首を切っているよ
血を抜いているよ
逆さになってまだ揺れているよ
今夜はすき焼きにするよ
食べに行かなきゃ
裸で

◆送付します

いなだ豆乃助

殺意を送付します
今から送付します
まちがえたらごめんなさい
人としてごめんなさい
ほんとうに送付します

◆八月のたわし

いなだ豆乃助

トラックいっぱい
わしを積んで
カムチャッカ
島めざす
人殺し
流れ
ビ

◆あおいじかん

原田ひでよ

とっぷりと日が暮れて真っ暗になる前の
ほんのみじかいときを
わたしは　青い時間と呼んでいた

幼いむすめは
可愛い声で　カタコトのように
アオイジカン　アオイジカン
と繰り返した

一緒にいられるときは
かならず
あおいじかんやな
と澄んだ声で言った

わたしがうつむいていると
あおいじかん　終わってまうよ
と大人びた声で呼びかけられ
顔を上げることもあった

その声は
いつしか
あおいじかんが訪れると
わたしの中に
灯るようになった
青い海の彼方に臨む
灯台のオレンジ色の光のように

◆今日　病院で

原田ひでよ

すてきな人にみとれた
ショートカットに黒いガーゼのワンピース
黒のラインのバレエシューズとかごバッグ

オシャレですね　お似合いです
どんなにか　声をかけたかったのだけれど
言えなかった今日の私

そうなのだ

言えなかった あのときの私
発せられなかった言葉たち
未整理の書類のように高く積み重ねられたまま
言ってしまった　あのときの私
発してしまった言葉たち
誤って提出してしまった書類のように処理されないまま

いずれも破棄できず
自分を浸食し続ける

◆三叉の一如

大橋愛由等

水面に映る月の欠片を割譲しようと
薄紙で作った杓子で
うっすら　すみやかに
すくっていたつもりが
伝書鳩の羽根がひとつ
イカロスを真似て
しどけなく失墜してくる
その羽根が脚を望んでいたので
ねじ巻き式の
機械じかけの
マリオネットを
水際においてみると
みるみるうちに
酷似の蟲たちが
わさわさ寄ってきて
草木一如
騒ぎ出し

求め始める
「なにを」と問うても
石たちのことばは
自同律ばかり
未生の定型なのかと構えた
「ちがう」としか
樹木のもったいぶった蔭が
もそもそ動き出したそのとき
三叉に別れた風に乗り
脚をつけた羽根を追い
豚小屋の近くに
たどり着くと
美味な栗が
ざっぱり並んでいるのを
酷似の蟲たちが
数えだす
「意味がほしいの」との
問いを交わしつづけるのは
逐電した男と女
そんな彼らを
道理をまとった老婆が
森の阿頼耶識を持ち出し

夜の劇場の
見世物にしようとする
ため息を餌に
阿頼耶識を捕縛すると
森が「わたし、わたし」と
連呼しだすので
百度の声を蒐めて
三叉に別れた風が
透過しやすいように
胸ぐらをあけ
マーガレットの花の香りを
したたらせ
還ってきた
水面で男と女とマリオネットは
純白のアバニコに
書き記す
光の断片は
夢をつきやぶって
朽ち果てるまで
踊りつづけているのだから

◆都会掌景

野口 裕

切株という木皿に
きちきち犇めく
茸の活け作り

色鮮やかとはいかぬが
滲みか虹か分からぬままに
てらてら光を跳ね返している

偶然という名のシェフが
雨のドレッシングをかけるのに
誰も食べない
誰も食べようとしない
誰も食べられない
都会の雑踏に生えたものは
すべて毒なのだ

手を付けるのは
食欲衰えた「時の翁」の
珍しく小腹空かせたとき
腐りかけが一番甘いと
ひょいと呑み込むはず

だがそれにはおよばない

木皿に食い込んだ鉄が匂い出せば
そろそろ脱出しようかと
胞子どもが騒ぎ出す頃合
長雨の上がりに風来て
季節は遷る

風待ちは人待ちだよと昼の月
信号変わるさあ通りゃんせ

◆焚き火

冨岡和秀

夕暮れ、焚き火の炎が揺れ、地面に映る人々の影も揺れている。焚き火を囲んだ小さな人体の群れ。未来は焚き火の炎のなかに宿り、炎に映えて影が地面で群れになる。しかし影の群れがゆらゆら揺れている場はディストピアだ。炎に宿る火の花に未来の望みを託す群れの心理の眼が泳いでいる。

陽が落ちると、その場から影の群像が疾走する。夜が走る。影の群れが林を抜けて洞窟に向かうとき、一つの松明を先頭に影の群像が伴走する。松明は洞窟の入り口で、門灯のように立てられ、影の群れは洞窟のなかへ逃走する。

洞窟のなかは松明の炎で明るさが保たれ、いくつかの影の眼が壁に描かれた牛、鳩、鹿、山羊、蛇を見る。蜜柑、林檎、柿、茱萸、柘榴の果物を見る。影の眼が山羊を凝視する。いつのまにか炎そのものの影が洞窟に忍び込んで、矢型の影を壁面に揺らせている。矢の先に柘榴が吸い付き、炎の影でできた弓が山羊に放たれると、山羊の絵から血が流れて、山羊の肉が影の包丁で捌かれる。影の群れは山羊の肉を食べ、空腹を満たすとき、いまひとつの奥に隠れている絵を見いだす。群れは見る。壁に「焚き火」の絵が記憶の幻化のように貼り付いているのを見る。原始のマボロシを表したような焚き火の絵に群れが和み、力を獲得する。影の群れは元型が如実に意識されるのを感ずる。

影の群れは洞窟のなかでは侏儒であり、そばには大猫が侍っている。空腹を満たした影の群れはいっせいに眠りに入り込むが、群れの影は洞窟の壁、地、天井で揺れ、影を揺らせながら眠りの洞穴へ、夢の無限軌道へ侵入して行く。洞窟の入口の松明が静かに燃える音楽となり入眠儀式のようにふつふつ鳴り続く。

曙、入り口の松明が燃え尽き、影の群れが目覚めると、壁絵の鶏が一声鳴き、大猫を先頭に集団となって野外に這い出す。太陽の明るみを感じると影は自らを変容させ、影の人体を形成しながら、昨日の夕暮れにいたディストピアの場へ疾駆する。

洞窟で英気を養った影の群像はひときわ大きなカタチと力を集め、消えた焚き火の跡に立ち、東の方、太陽の登る丘へ眼差しを集める。大猫が鳴くと全ての影が揺れ、それを合図にその場を上昇する。舞い上がる影の群れは洞窟で食べた絵の山羊肉を糧として影の能力を発揮したかのように、下方に見えるディストピアの場を変容させる。

焚き火の跡に残された灰は空から舞い降りる風で消え去り、影の群れがそれぞれの願いの内から生み出した建物が忽ち建ち上がる。合金の含有する強化硝子で透明性の高い開かれた建物。外部から見え、内部でも影の形態が透明性の高さを保たれる共同空間。

鋼のような強化硝子の張られた建物のなかには柔らかな蛍光が満ちあふれる。影の群れは大猫とともに舞い降り、忽ちのうちに自らの影を消し、豊かな元型をまとった「侵すべからざる形態」を回復する。形態の集まりに染み渡るように大猫が鳴き、形態は言葉化した鳴き声を聴く。

「この建物に真の世界が広がる。ディストピアはこの内部空間から去り、この場所は比類ない心的な新生空間となる。形態は主体の虚構性を認識し、次のメタ時代を生み出すだろう」と予言的言葉を発する。

その言葉を保証するように、外には太陽の柔らかな光が漂う。建物内には暖炉に灯された蛍光色の炎が燃え蛍の花が爛漫と咲いて、確かな未来の望みが沸き上がってくるのを預言的な生成音楽の響くなかで待っているのだ。

神戸詞（うた）あしび

164-2022.10.30 大橋愛由等

ロルカ「血の婚礼」を観て コロスの詩的位相を考える

ひとつのことが同じ系列のことを呼び込み連鎖することはあるものだ。

「現代詩手帖」にフェデリコ・ガルシア・ロルカ詩集の書評文をメール送稿して一息ついていたとき、朝日と読売新聞の演劇紹介欄に、ロルカの三大悲劇のひとつ「血の婚礼」が、大阪の梅田芸術劇場で上演されるとの記事が掲載されている記事を読んだ。ロルカの詩世界にたゆたっていたこともあり、最終日の公演を観に行くことにした。

演出は杉原邦生氏。翻訳したのは、スペイン演劇研究の第一人者である田尻陽一氏である。前半はほぼロルカの脚本に沿ったリアリズム演劇風に進行。休憩を挟んで「神話的な森」（牛島信明「ロルカ血の婚礼」解説文より）を舞台にした第二部が演出家の腕の見せどころとなった。ロルカの原作にはなかった花婿とレオナルド（花嫁とともに婚礼の場所から逃げた男）の決闘場面は迫力があった（原作では森に棲む乞食の老婆が事後報告的に村の娘たちに二人の若者が死んだということで済ませている）。

「血の婚礼」ポスターをバックに立つロルカ（右）

このロルカ演劇でいくつか注目したなかで、ロルカがギリシア悲劇から影響を受けているという指摘である。牛島氏は「悲劇の蘇生をもくろんだロルカがギリシア悲劇を意識していたことであろうことは明らかであるが、自作に合唱（コロス）をきわめて効果的に取りこんいるところからして明らか」（同）と書く。「血の婚礼」の中では、森の中での第三幕第一場の木こりたちの台詞（花嫁とレオナルドが婚礼の場から逐電し、その二人を捕まえようと追手が迫っている現状を〝解説〟している）が合唱（コロス）の形式に沿っているといえよう。

わたしは少年のころから、ギリシア悲劇を好んで読んできた。（それはおそらく映画のシナリオを書いていた父の影響かもしれない）。そうした読書歴の中で、近年気になっているのがこの合唱団（コロス）という存在である。悲劇の主人公たちが、自らの悲劇性に拘泥しながら堕ちていくその最中に、その主人公たちの立場に同調したり、ときに世間知を披露して、その悲劇性を相対化しようとする立場も担うことがある。ニーチェはシラーの言葉を引用してこう解説する。「彼（シラー）は合唱団を、悲劇が現実の世界ときっぱり隔絶できるように、そして悲劇特有の理想的領域とその詩的自由を確保するために、悲劇のまわりに引きめぐらせれた生きた城壁だと見ているのである」（ニーチェ著『悲劇の誕生』岩波文庫、秋山英夫訳）。

ニーチェはさらに突っ込んで表現する。「悲劇が悲劇の合唱団から発生したものであること、もともと悲劇は合唱団（コーラス）にすぎなかったのであり、合唱団以外のなにものでもなかったということだ」（同）。ニーチェは、ギリシア悲劇が本来「ディオニソス的」だった様相から、「アポロン的」な世界になっていくことに対して批判的であり、「コロスを俳優に近づけたソフォクレス、それを「詩学」で支持したアリストテレスは共犯者」（アリストテレス著『詩学』、光文社古典新訳文庫、三浦洋の解説文）だとみなしている。

ではははたしてコロス主体の演劇とはいったいどんな形状だったのか。ニーチェにとって根源的で理想的なギリシア悲劇とは、サチュロス劇だとみる（サチュロスは半人半獣でディオニソスの弟子）。現存する唯一のサチュロス劇であるエウリピデス作「キュクロプス」を読むと、コロスの存在が大きく、けっして脇役ではなく、コロスと俳優の役割が「未分離」であり、ときにコロスが劇進行の主導権を握ることもありうる内容である。コロス主体の演劇（あるいはコロス的位相が全面に出た詩）というありようについて、わたしはニーチェに刺激されつつも、限りない興味を抱いているのである。

―誌名変更のお知らせ―

ながらく誌名を「月刊 Mélange」としてきましたが、170 号から「月刊 MAROAD」に変更しました。これは、「月刊 Mélange」発行当時（2005 年）から 17 年が経過して、参加構成メンバーが入れ替わり、現在の誌友・詩友たちとの連帯を確認し、今後の表現活動の切磋琢磨を願うために変更したものです。（大橋愛由等）

2022 年 10 月 30 日　通巻 177 号
発行所／月刊「まろうど」編集部
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F
編集・発行人／大橋愛由等
maroad66454@gmail.com
定価 660 円(税込)